**「主の道を歩もう」**

**待降節第１主日・A年（16.11.27）**

**主の道を歩もう**

　、迎えた待降節は、まず、主が再び来られる日を目指して、信仰の歩みを整えるよう呼び掛けていると言えましょう。ですから、早速、第一朗読では、紀元前８世紀にユダ王国で活躍した預言者イザヤの感動的な預言を伝えてくれます。それは、まさに戦争勃発の危機に直面する緊張状態の最中、何と希望に満ちた平和実現の預言にほかなりません。

　つまり、救いが完成する**「終わり日」**を、目指して**「国々はこぞって大河のようにエルサレムに向かい多くの民が来て言う。**

**「主の山に登り、ヤコブの家に行こう。**

**主はわたしたちに道を示される。**

**わたしたちはその道を歩もう。」と。**

この預言を、今日の世界の現状にあえて当てはめるならば、新しい神の民である教会こそが、全世界の人々が神の道を歩むことができるよう、まさにになる尊い使命を担っていると言うことではないでしょうか。

　ちなみに教皇フランシスコは、あたかも預言者のように、第三次世界大戦が、すてに散発的に始まったと警告を発しておられますが、世界平和の実現がますまる遠のいてしまうような深刻な世界の現状において、我々キリスト者は、の平和実現に向けて人類は、どのように歩むべきかを、声高らかに預言する責任が課せられているのではないでしょうか。

　イザヤは叫びます。

　**「主の教えはシオンから**

**みことばはエルサレムから出る。**

**主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。**

**彼らは剣を打ち直しとし**

**を打ち直して鎌とする。**

**国は国に向かって剣を上げず**

**もはや戦うことを学ばない。」**

ちなみに、このイザヤの預言は、確か、ニューヨークある国連本部の庭に掲げられております。

　とにかく、戦後70年を迎えた我が国においても、に戦争のできる国へと暴走している現政権を、何としてでも食い止めなければなりせん。

ちなみに、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、1981年2月25日「広島平和アピール」を、九か国の言葉で全世界に向けて力強く訴えらました。その中で、**「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことである。」**と繰り返し強調なさいました。

　ですから、我が国の70年前の戦争の歴史を、十分に反省しない限り、平和な未来を構築して行くことはできません。

**眠りから覚めるべき時**

　いみじくも、パウロは、今日の第二朗読で、警告しております。

　**「あなたがたが眠りから覚めるべき時がすでに来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。・・・だから、闇の行いを脱ぎ捨てで光の武具を着けましょう。・・・主イエス・キリストを身にまといなさい。」**と。

　戦争の愚かさと残酷さを忘れてしまい、まさに平和ボケに陥っている今日、実に、目を覚まし、これから目指すべきをしっかりと確立する重大な責務があります。そこで、われわれキリスト者は、**「キリストを身にまとい」**つまり、キリストと一体となってこれからの日本が歩むべき道筋を明確に描いて行かねばなりません。

　それは、典礼聖歌で歌っているように、**「キリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行い、キリストのように愛する」**ことにほかなりません。

　さき程、行われた「入門式」は、生涯かけてキリストに倣う生き方を身に着けるために本格的な準備を始める式でした。なぜなら、キリスト者の生き方は、まさに一生かけて実行して行く、全く新しい生き方にほかならないからであります。ですから、信仰者の生き方は、生涯教育にほかなりません。それはまた、主の再臨による救いの完成を目指して歩み続ける巡礼の旅でもあります。

**人の子は思いがけない時に来る**

ですから、今日の福音で、イエスは、**「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来る。」**と警告なさっておられるではありませんか。

　つまり、わたしたちの巡礼のゴールは、救いの完成の暁に、主が再び天使を従えて栄光のお姿で来られる日を目指しているからにほかなりません。しかも、そのときは、だれにも知らされておらず、まさに**「思いがけない時に来る」**のであります。したがって、同じことをし、同じ場所にいても、片方は救われ、片方が滅ばされるという全く異なる結末になるというのであります。ですから、イエスは次のように警告なさいます。

　**「畑に二人の男がいれば、一人は連れていかれ（神の国に入る）、もう一人は残される。二人の女がを引いていれば、一人は連れていかれ（神の国に入る）、もう一人は残される。」**からであります。

　では、この決定的違いは一体どこからくるのでしょうか。それは、主ご自身が、次のように極めて明確に答えてくださいます。

　**「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの父の御心を行う者だけが入るのである。」（マタイ7.21）**

　では、御父の御心を、どのようにして悟ことができるのでしょうか。それは、言うまでもなく、聖書全体にわたって読み通すことによってこそ、御心を読み取ることができるのでないでしょうか。

　ですから、A年、B年、C年と三年かけて聖書全体の大切な箇所は、主日のミサですべて朗読され、説教によって説明されているのであります。

　したがって、みことばが、わたしたちの一回限りの人生において豊かな実りをもらたすためになくてはならない方法を、種蒔きのたとえで、ルカは、次のように教えてくれます。**「よい土地に落ちたのは、立派な善い心でみことばを聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」（ルカ8,15）**

　待降節に当たり、日々の生活の只中で、みことばの豊かな実りを結ぶにことができるように、共に祈りましょう。